

「小論文」

(120 分)

注意：解答はすべて解答用紙に記入すること。

【問題】 次の文書1は『武士道』という本の一節です。この文書を読んで、以下の設問(A)、(B)に答えなさい。

(A) 日本の開国当時、文中にある下線αのような状況や評価を生じてしまった原因を、解答用紙 10 行以内で述べなさい。

(B) 「正直であること」「誠実であること」が、どのような意味を持ちうるか、具体例を挙げながら、あなたの思うところを述べなさい。

文書 1

第七章「誠」－なぜ「武士に二言はない」のか？

真のサムライは「誠」に高い敬意を払う

真実性と誠意がなくては、礼は道化芝居か見世物のたぐいにおちいる。伊達政宗は「度を越えた礼は、もはやまやかしである」といつている。

「心だにまことの道にかなひなばいのらずとても神やまもらむ」

この歌を詠んだ昔の歌人にはポロニウスを越えるものがあつた。

孔子は『中庸』の中で誠をあがめ、超越的な力をそれに与えて、ほとんど神と同格であるとした。すなわち「誠なる者は物の終始なり。誠ならざれば物なし」と。そして孔子が熱心に説くところによれば、誠は次のとおりである。まず至誠は広々として深厚であり、しかも、はるかな未来にわたって限りがない性質をもっている。そして意識的に動かすことなく相手を変化させ、また意識的に働きかけることなく、みずから目的を達成する力をもっている。「言」と「成」の部分からできている誠という表意文字の組み合わせを考えると、私たちは新プラトン学派のロゴス説との比較を試みたくなる。この賢人(孔子)は、その非凡な神秘的飛翔で、そのような高みにまで到達したのであつた。

嘘をつくこと、あるいはごまかしは、等しく臆病とみなされた。武士は自分たちの高い社会的身分が商人や農民よりも、より高い誠の水準を求められていると考えていた。

「武士の一言」、あるいはドイツ語でこの言葉の同義語にあたる「リッターヴォルト」は、断言したことが真実であることを十分に保証するものであつた。

このような語句があるように、武士の言葉は重みをもっていると言われていたので、約束はおおむね証文無しで決められ、かつ実行された。むしろ証文は武士の体面にかかわるものと考えられていた。「二言」つまり二枚舌のために死をもって罪を償った武士の壮絶な物語が数多く語られた。

「誓うことなかれ」というキリストの明らかな教えを絶え間なく破っている大方のキリスト教徒とちがって、真のサムライは誠に対して非常に高い敬意を払っていた。そのため、誓いをするをみずからの名誉を傷つけるものと考えていた。

もちろん、私は彼らが八百万(やおよろず)の神々の名にかけて誓ったり、刀にかけて誓ったことをよく知っている。しかし彼らの誓いの言葉は、けっして、ふざけた形式や大げさな祈りにまで墜ちはしなかつたのである。ときには、その言葉を補強するために文字どおり血判を押すという行為がとられた。このような行為の説明としては、私は読者にただゲーテの『ファウスト』を参照されたい、ということとどめる。

近年、あるアメリカの著述家は次のような所説を発表した。それは、もし普通の日本人に嘘をつくことと、無作法であることのどちらがましであるか、ときいたら、彼は躊躇なく「嘘をつくこと」と答えるであろう、というものである。

このように述べたペリー博士は一部において正しく、他の一部において誤っている。正しい点というのは普通の日本人、いやサムライでさえも彼が述べたように答えるだろうということである。正しくないという点は、彼が「嘘」という日本語の言葉を“falsefood”と翻訳して、その言葉に重みを置きすぎているという点である。

「嘘」という日本語は真実(誠)でないこと、あるいは本当でないこと全部を示すために用いられている。ローウェルは「ワーズワースは真実と事実を区別できなかった」といったが、この点では普通の日本人はワーズワースと同じである。

日本人、あるいはいくらか教養のあるアメリカ人に、その人があなたを嫌っているか、あるいはその人が胃を悪くしているかをたずねてみるとよい。その人はためらいなく嘘をついて「いや、あなたをたいへん気に入っています」とか「とても元気です」と答えるにちがいない。しかし、単に礼儀を欠かないために真実を犠牲にすることは、「虚礼」とか「甘言による欺瞞」とみなされた。

武士道と商人道とは何が違うか

私は今、すでにおわかりのように、武士道の誠の理念について述べている。だがここで日本の武士道について言葉を費やしても場違いではないと思う。というのは、私は外国の本や雑誌で、じつに多くの不平不満を聞いているからである。

わが国民の評判について、いい加減な商業道徳という悪名は最大の汚点である。(下線α) だがそれを非難したり、あるいはそのことから、日本人全体を性急に論議する前に、落ち着いて研究してみようではないか。そうすれば、将来において私たちはそれらの非難をやわらげることができるであろう。

人の世の中におけるあらゆる立派な職業の中で、商人と武家ほどかけ離れた職業はない。商人は社会的身分階層としては士農工商の最下位に置かれていた。サムライは土地からその禄を得ていたし、もしその気があれば家庭菜園で農耕をすることもできた。だが銭勘定ごとと算盤は徹底して忌み嫌っていた。

私たちはこの社会階級の序列の底にある知恵を知っている。モンテスキューは、貴族を商業から締めだすことは権力者に富を集中させないためのほめられるべき政策である、と明言した。権力と富の分離は、富の分配をより平等に近づけることに役立った。『西(ローマ)帝国最後の世紀におけるローマ社会』の著者であるディル教授は、ローマ帝国衰微の原因の一つは、貴族が商業に従事することを許可し、そのためにごく少数の元老とその家族が富と権力を独占したことにあることを私たちの前に明らかにした。

以上のような制約があったために、封建制下の日本では、商業はもっと自由な状況下であれば到達しえたであろうほどには発展しなかった。商業につけられたいやしめの観念は、おのずから世間の評判などにまったく頓着しない無頼の徒を寄せ集めることとなった。

「人を泥棒と呼べば、彼は盗むであろう」。一つの職業にいやしめの言葉をつけよ。そうすればその職業に従う者は、その道徳をそれに合わせる。ヒュー・ブラックがいうように「正常な良心はそれに対して要求されたところまで上昇し、それに対して期待された水準の限界にまでたやすく降りる」のは当然である。

商業であれ、他のどんな生業であれ、いかなる職業もなんらかの道徳律がなくては取引が成り立たないことは明らかである。

封建時代の日本の商人は仲間内で道徳律をもっていた。またそういうものがなくては、たとえ未熟な発達程度であれ、株仲間、両替商、相場、裏判、手形、為替などのような基本的な商業制度を発展させることはできなかった。しかし、彼らの職業以外の人びとの関係においては、商人たちはその身分に与えられた世評どおりの接し方をした。

このような事情であったために、日本が開国して外国貿易がはじめられたとき、あわよくば、ひと儲けをたくらむ無節操な連中だけが開港場へ駆けつけた。他方、篤実な商家は開港場に支店を開くようにという幕府の再三の要請をことわりつづけていた。では武士道はこの時代において商業の不名誉な潮流をくい止めるには無力だったのか。これを考えてみよう。

誠とは実益のある徳行

日本史をよく知っている人たちならば周知のように、外国貿易のために開港場が開かれてほんの数年後に、封建制度は打ち棄てられた。それと同時にサムライの秩禄が没収され、その代償として公債が発行されたとき、彼らにその公債による資金を商取引きに投資する自由が与えられた。

ここで読者は「彼らは、なぜあの素晴らしく、みずから誇りとしていた誠を新しい事業にもちこみ、古い悪弊を手直しすることができなかったのか」とたずねられるだろう。だが、多くの清廉潔白なサムライたちには、手練手管を弄する下層階級の競争相手と伍して、抜け目なく商売をやっていく力がまったく欠落していたのである。商業や工業というなじみのない新しい分野で、彼らはとり返しのつかないくらいの大きな失敗をした。

彼らのこの運命を、見る目のある人は泣いても泣ききれず、また心ある人は同情してもしきれなかった。アメリカのような産業国家においてさえ、実業家の 80 パーセント

は失敗すると聞いている。したがって士族の商法に手を染めたサムライのうち、百人に一人だけがかろうじて新しい職業で成功したとしても、不思議はないのである。

武士道の道徳を事業の運営に適用しようとして、どれほど多くの資産が消滅したかを認めるには、なお時間を要するだろう。だが、洞察力の鋭い人には、富の道が名誉の道ではないことがまもなく明らかになった。では、この二つの道はどの点が異なっているのだろうか。

レッキーは誠がはたらく三つの要因をあげている。すなわち産業、政治、哲学の三つである。第一の産業の局面においては武士道は存在しえない。第二の政治に関しては、封建制下の政治社会においては多くの発展をみることができなかった。そして正直さが徳目の中で高い地位を得たのはまさに哲学的な、そしてレッキーのいうようにその最高の表現においてであった。

アングロ・サクソン民族の高い商業道徳に対する私の偽らない敬意をもって、私はその根拠をたずねたことがあった。するとその答えは、正直は割に合う、すなわち「正直は最善の策」である、というものであった。そのようにいえば、この徳はそれ自身の「代償」ではないか。そうだとすると、正直さを守り通すことは、嘘をつくことよりも多くのカネをもたらすためである。正直がカネになるというのでこれを守る、というのであれば、私は武士道はむしろ嘘にふけるのではないかと思う。

武士道が「目には目を」という“代償の原理”を否定するものだとすれば、抜け目のない商人たちは唯々諾々とそれを受け入れるにちがいない。

レッキーが「誠はその成長を主として商業と工業に負っている」といったことは、まことに正しい。すなわち、ニーチェがいうように、正直はいろいろな徳のうちでもっとも若い徳である。いいかえれば、それは近代産業の養子である。近代産業という母がなければ、誠はもっとも高い教養の持ち主の心だけが養子として育てることができるような、名門の生まれの孤児のようなものであった。そのような心はサムライに一般的であった。しかし、より民主的で、しかも実利的な養母がいなくては、この虚弱な幼児を丈夫に育てあげることとは不可能であった。

産業が発達するにしたがい、誠は実践しやすい、むしろ実益のある徳行であることが明らかになってきた。ビスマルクがドイツ帝国の在外領事に訓令を送り、「ドイツ船舶の積荷には、明らかに質、量の両面において『ゆゆしい』信頼度の欠落がある」ことを警告したのは、つい近年の1880年11月であったことを思い出してみるとよい。今日、私たちは商取引におけるドイツの不注意や不公正についてあまり聞くことがなくなった。およそ20年の間に、ドイツの商人たちは、結局は正直が割に合うことを学んだのだ。そしてすでに、日本の商人たちもこのことを学んでいる。

さて、私は読者に、この点について適切な考慮が払われている二冊の近著を紹介しよう。

これに関して、商人である債務者にとっても、誠意と名誉が約束手形の形で差し出すことのできるもっとも確かな保証であることを述べるのも、興味深いことである。「恩借の金子御返済相怠り候節は衆人の前にて御笑いなされ候とも不苦候(くるしからず)」とか、「御返済相致さざる節は馬鹿と御嘲り被下度(くだされたく)候」などという文言が書きこまれることは、ごく普通のことであった。

私はしばしば、武士道の誠が勇氣以上の高い動機をもつかどうかを考えた。偽りの証言をすることに対するなんらかの積極的な戒めがない中で、嘘をつくことは罪悪としてとがめられたのではなかった。むしろ弱さとして批判された。そして、弱さは大いに不名誉であった。

実際のところ、正直の観念は名誉と分かちがたく混合している。「正直」のラテン語とドイツ語の語源は「名誉」と一致する。そこでいよいよ武士道の名誉観を考察する時がやってきた。

(出典：新渡戸稲造(著)・奈良本辰也(翻訳)『武士道』三笠書房 知的生きかた文庫(1993年)71-79頁。なお問題文では、縦書きの原文を横書きに変え、漢数字を算用数字に変え、漢字のルビおよび註を省略している。)

入試日程 B 日程 出題科目名 小論文

1. 出題の意図

課題文の原文は英語である。“Bushido” は、近代日本の社会背景、思想、哲学に関し、西欧諸国が理解を示す手がかりとなった貴重な文献といわれている。その英語の論文を日本語に翻訳した『武士道』であるために、やや表現が文語調で、読みにくい文章との印象を否めないが、論説文としては、その理論構成及び論証が整然となされているものと思われる。

解答の指針として、まず課題文筆者の主張を前提として踏まえ、設問において求められた事項に的確に回答することが必要になってこよう。問題（A）の解答事項については、課題論文の中に答えが明記されているとあってよい。解答者各位の自己の価値観において、課題文を誤解して読んだり等していないか否かを試す問題である。一方、問題（B）では、課題文筆者の価値観や事物の解釈に対する批判的検討を、受験者が展開しうるか否かを測る問題である。ここで注意してほしいのは、小論文科目は必ずしも法律に関連する事項の解答である必要はないということである。むしろ、ある見解や意見一般に対する批判眼の有無、支持意見・反対意見の理由づけの十分さや、論証の手順の適切さこそが問われているのであって、まさに、問われたことは何か、応答すべき事項は何かを把握できているかが、評価の主要基準となる。さらには、「正直であること」「誠実であること」という、抽象的な概念から、いかに、具体的な事実を例示し、説得力ある論述をなしうるかを、出題者は期待しているといえる。他者の主張を正確に把握する資質を確認し、他者の主張を正確に把握した上で、その主張のどの部分に賛同し、どの部分に異を唱えるか、そのような議論を発展させる能力を推認するための問題である。社会科学の世界にとどまらず、他科学の分野においても、およそ実りある議論をなすことや、成熟した思想、共通見解を実現するためには、それらの能力は不可欠なものと考えられる。

2. 講評

受験者の解答のうち、課題文の内容を十分に理解できていないものが数点見受けられた。それほど長い文章ではないので、論述の時間を考慮したとしても、一定の時間を割いてしっかりと読み込んでほしい。課題文を理解できていないと、自然、自己の見解として記述する問題（B）の解答となる文章の内容は、課題文の主張に対応していないものになりやすく、その結果、説得力を欠くものとなりやすい。

正直であること、誠実であることが、日常生活や倫理規範の上でどういう意味を持つてくるかに加え、職業や商業上の行動規範として、それらがどのような結果を生じ、いかなる効果を持つかを論じることが、本問では要求されている。新渡戸稲造博士の、「正直は割に合う」ものであり経済上の利益につながる、という結論に対して、批判するも賛同するも、可能であろう。また、主要論述議題のほかに副次的な議題として挙げられている、真実に反する言動も「礼」として時には必要であるという視点については、それが作用するのは個人の私生活のレベルであるのか、商業上の取引の場においてもなお妥当するとみるべきか、解答者の重視する価値観によって判断の分かれる点であろう。

2013 年度愛知大学法科大学院入試問題集

上記の論点を十分に論述したうえで、正直さ、誠実さの中身、内容が、産業界、政治の領域、哲学分野で、それぞれ異なってよいのではないか、つまり、同一の言語概念も、作用する領域が異なればその内容は完全に一致しなくてもよいのではないか等の提言をなすに至れば、相応の評価を得ることになる。